

「ジョークで時代をふっとばせ！」のブックレポート1 2002.6.14 金子尚人
2002年6月10日 第1刷発行 青春出版社青春文庫

1. 著者紹介

落合 信彦（おちあい のぶひこ）

国際政治ジャーナリスト・作家。1942年1月8日東京生まれ。夜間高校を卒業後、単身渡米。アメリカのオルブライト大学、テンブル大学大学院で国際政治学を専攻。インディペンデントのオイルビジネスに従事したのち、会社を売却して帰国し、ジャーナリストに転身。97年オルブライト大学より人文学名誉博士号を授与される。著書に『10年後の自分が見えるヤツ 1年後の自分も見えないヤツ』『1度の失敗であきらめるヤツ 10度の成功でも満足しないヤツ』など。

2. 内容概観

ジョークを理解することは、自分の世界を大きくすることにほかならない。世界が大きくなればなるほど人生は楽しくなる。この本では20世紀後半の歴史と、そこに生きたさまざまな人物を、ジョークを軸にして映し出している。

3. 最重要事項解説

質問：日本人のサラリーマンを月曜日の朝に笑わせるにはどうしたらいいか？

答え：金曜日にジョークを言ってやればいい。

ユニヴァーサルなジョークを理解し、笑えるためには文化的、歴史的知識が必要となってくる。それがなければジョークの基本となるバックグラウンドがわからない。となるとジョークの意味もわからない。

クリントン、ヒラリー、アル・ゴアーの3人がワシントン上空をヘリで飛んでいた。

まず、クリントンが言う。

「いま、私が100ドル札を下に落とせば、誰かが幸せになるな」

それを聞いたヒラリーが、

「どうせ100ドル使うなら、10ドル札10枚落としてやれば、10人の人が幸せになるじゃない」

これに対してアル・ゴアーが、

「私だったら1ドル札100枚にするね。そうすれば1000人の人を幸せにできる」

その時ヘリのパイロットが向き直って、

「あんたがた3人をここから落としたら、2億5000万の人々が幸せになりますよ」

第1章 ユーモアの生まれた国—混沌の1950年代—

Q：ユダヤ人の鼻は、なぜでかいのか？

A：空気はタダだから。

これは「ユダヤ人はカネに細かい」というステレオタイプに突け込んだジョークである。このようなジョークをエスニック・ジョークという。エスニック・ジョークとはある民族や人種をステレオタイプ化して、その点を突くジョークである。エスニック・ジョークで

最も多く登場するのが、ユダヤ系、黒人、そしてポーランド系だが、なぜか、黒人とポーランド系はうすのろで、IQが低く、怠慢として扱われる。

アラブ人などから見ると、イスラエル人は無愛想で傲慢に映る。話し方がぶっきらぼうで、単刀直入、礼儀らしきものも持たない。しかし、イスラエル人に言わせれば、それはただ、合理性を重視しているだけだという。つまらない挨拶や社交辞令は、時間の無駄というわけである。

経済制裁を科せられたイスラエルは、食糧不足に悩まされていた。特に、食肉不足は深刻だった。あるイギリス人の世論調査員が、エルサレムのバス停で4人の男に質問をした。4人の内訳はアメリカ人、ポーランド人、中国人、そしてイスラエル人。

「失礼ですが、世論調査に協力していただけますか？食糧不足に関しての意見を聞かせてもらいたいのですが」

これに対して、まずアメリカ人が聞く。「不足ってどういう意味かね？」

ポーランド人は、「食肉ってどういう意味かね？」

中国人は、「意見ってどういう意味だい？」

そしてイスラエル人、「失礼ってどういう意味だね？」

ユダヤ人は、非常に自己主張が強い民族である。特に政治の話になると、その自己主張にさらに熱がこもる。2人のユダヤ人がいたら、3つの意見が出て、4つの政党ができる、といわれる所以である。

アメリカ大統領アイゼンハワーと、ベングリオン首相が会った。当時は、アメリカの人口が約1億7000万、イスラエルの人口が200万人だった。

アイゼンハワーが言った。

「アメリカの大統領というのは大変だよ。1億7000万の国民の大統領なんだからね」

これに対して、ベングリオンが首を振り、

「私のほうがはるかにきついよ。何しろ200万人の首相の首相なんだ」

イスラエル国家は建国からずっと、周囲の敵によって攻められ続けた。しかし彼らは生き残った。なぜか？メイヤー首相は言った。

「対アラブ戦において、われわれユダヤ人には秘密兵器がある。それは、われわれには、ほかに行くところがないということである」

ヒトラーが占い師に尋ねた。「私はいつ死ぬだろうか？」

「あなたはユダヤの祭りの日に死ぬことになっています」

それを聞いたヒトラーはすぐに秘書を呼んでこう言った。

「ユダヤの祭日をすべて調べろ！」しばらくして秘書が戻ってきた。

「これがユダヤの祭日です」

「こんなに少ないのか。よし、この日は護衛を100倍にするんだ！」

こう叫んで安心しているヒトラーに、占い師が言った。

「総統、あなたがお亡くなりになったら、その日がユダヤの祭日になるのですよ」